

令和2年度（2020年度）に寄せて

教職センター長 石 原 義 文

今年度は、新型コロナウイルス感染症という未曾有の事態の中で、学生・教職員の皆様の協力のもと、遠隔授業という形態が、春季セミナーから導入され、前期の授業では全学的に実施されました。後期は対面授業と遠隔授業を併用して授業が実施されました。

当然、教職課程においては、実習を伴う授業が多大な影響を受けました。また、ボランティアや、学校現場を訪問して授業観察を行うような学校体験の機会も制限を受けました。

教育実習を申請している学生は全員、実習校の確保ができたものの、実習期間の短縮や、実習が中止されるケースもありました。これに伴い、大学での代替措置を考える必要がありました。また、新たな実習先の確保も大きな課題となりました。教育実習に際し、コロナ感染予防のためのガイドライン作成も、教職センターとして策定する必要もありました。

このように、教職過程において、ほぼすべてのことについて、新たな方策を考える必要のある年でした。関係の教員や職員のみなさまの献身的な努力に心よりお礼を申し上げたいと思います。

大変な1年ではありましたが、一方、教職員、学生の創意工夫が求められる年でもありました。これまでのやり方を踏襲できないことが、新たなやり方の模索につながり、それは同時に従来の方法の改善や、見直しにつながる部分もあったように思います。私自身に関して言えば、例えば遠隔授業一つとっても、「必要に迫られて、教えたり学んだりするためのICT利用のリテラシーを身に付けられた」というプラスの面がありました。

コロナの収束は未だ不透明な状況です。不確かさの中で、できることに精一杯向き合い、助け合うこと、創意工夫すること、新たなことへ挑戦することを、教職センターとしても心していかななくてはならないと考えさせられた1年であったと思います。コロナ禍において積み重ねた経験や実績を踏まえ、これまで以上に、機能を発揮できるよう努力し続けていきたいと思っています。